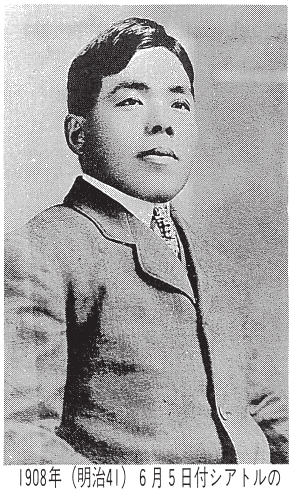
連載〈松山おもしろ人物伝〉①

開拓期のアラスカで活躍した

和田重次郎とその母セツ

元松山市立素鵞小学校長
伊予史談会会員
上岡　治郎



1908年（明治41）6月5日付シアトルの新聞に掲載された和田重次郎（35歳）

一、和田重次郎を追って

和田重次郎は私にとって、まぼろしの英雄である。

私が素鵞小学校4年生（昭和10年）の時、日の出町で蚕種製造販売業をしていた父が、ある日のことぽつりと言ったことがある。

「この町に、明治時代アラスカに渡って成功し、毎年、アラスカから手紙と、お金を送って来る親孝行者がいたんだよ」と。

この話を聞いてから46年後の昭和56年4月、私は母校素鵞小学校に勤務することになる。

そして**「地域に根ざす教育」**をテーマに研究に取り組むことになり、素鵞校区の地域教材を収集する過程で、**『和田重次郎とその母セツ』**を知り、少年の日に父が話してくれた思い出とつながる。

自分の生まれた町に、こんな大冒険家で、母親想いの優しい人物が居たんだという思いは、郷土への誇りとなり、次の4冊の本を読むことによって更に深まる。

- **アラスカ・最後のフロンティア**　東良三著　昭48・7発行
- **アラスカ物語**　新田次郎著　昭49・7発行
- **犬橇使いの神様**（短編集）　新田次郎著　昭50・5発行
- **人物探検・和田重次郎**（雑誌）　谷有二作「山と渓谷」昭54・3月号

そして学校退職後、ふとしたきっかけで、重次郎の兄平太郎の孫に当たる和田利百さん（内子町在住）と知り合うことになる。

なお、この和田家は重次郎の母セツの最期を看取った家であり、現在も重次郎に関する貴重な資料が残っている。そして、その一つ『戸田金兵衛覚え書』は、身内の者の眼から見た**〈重次郎の実像〉**を鮮明に伝えてくれる。

防寒具（ビーバーの毛皮）を身につける極地探検家　和田重次郎

二、「戸田金兵衛覚え書」〈資料〉

「今を去る五、六十有年前の事です。父は和田源八、母セツと申し愛媛県周桑郡小松町で明治八年に生れる。生年月日は不明※（1月6日）

幼にして父に死別、後三歳位にして母と二人で愛媛県松山市日ノ出町に移住して来ました。私の五ツ年上であります。

成長するに従い女親の事ゆえ指導に困り、私の父に対し指導方を一任され、十二、三歳の頃、私方に引取り世話していました。二年間くらい。腕白者で、父も困難の様子でした。

当時私方は、製紙並びに原料商でした。従業員仲間に重次郎氏と同年、非常に仲良しの永井源二郎氏と申す人がありました。源二郎氏曰く。『重次郎氏は、製紙の手伝い等は嫌だ。俺は亜米利加に行くのだから、俺が成功したら君を呼んでやるから来い』と、平素申しておったようです。

折から突然私方を無断家出して伊予三津浜山谷運送店に行き、客引きとして入り込み、そのうち阪神航路のボーイと親密となり、頼み込んで神戸に来り、ある貿易商にはいり居るうち平素から希望の亜米利加行きを決意し、仲間に頼み込んで茶の荷造り中、茶と一緒に茶箱の中に入れて貰って密航した訳です。

年十七歳、明治二十四年でした。到着まで何十日間は、ボーイの厚意により食事万端世話になった由です。

サンフランシスコに到着したが昼の上陸不可能ゆえ、夜中にボートで上陸して夜通し無我夢中で歩き通し、夜が明けて日本人の住宅を訪ねました。

最初、食堂に入り辛抱して居るうちに人の進言により捕鯨船に乗り込み、一生懸命働き蓄積して、五年振り二十二歳で故郷の日ノ出町に錦を飾って帰国しました。

すぐさま親子二人で東京並びに六大都市見物に参りました。私の父も商用で大阪まで三人で参りました。

以上右の文面は、本人重次郎氏帰国の節の実談です。

左に申し述べます事柄は、私の青年時代に長く見聞せし事柄です。（※重次郎氏が帰国したのは）明治二十九年でした。三ケ月くらい滞在

して再渡米した訳ですが、帰った当時やはり捕鯨船生活をしていた事と察します。

手紙の文面、並びに亜米利加新聞を送って来た時の年、外国船が暴風のため暗礁に船を乗り上げ困難しておるところを、日本人和田重次郎なる者の救助により皆の者が救われたとの事が出ていました。勇敢なる日本人和田重次郎と大々的にありました。※(明治30)(23歳)

それから後、米人のマラソン競走があり日本人の出場者は和田重次郎一人でした。※(明治40)(33歳)

写真と新聞を一緒に送って来ましたが和田が一番小さく、身長五尺一寸、体重十五貫でした。驚くなかれ和田が一番で大変な賞金並びに賞品を頂いたが、さすがは和田、賞金全部をさし出し選手全員を招待したと新聞に出ていました。

それから間もなく結婚して女子があり、日米子と命名したと子供の写真も送って来ましたが、それ以後妻子の事は書いてなく、母親存命中も案じていたような次第です。今も一向判りません。

最後が、例の金山発見です。新聞に大々的に、『日本人和田重次郎なる者、砂金発見』と、出ていました。※(明治36)(29歳)

何分新聞が沢山来ていても、日本語に訳するのに非常な長時間を要するので困りました。松山中学(※現松山東高)の英語の先生にいつも頼むのですが、授業の余暇ですから一回の新聞を翻訳するまでに、後から来ておるので何十枚もある始末でした。…(中略)…

重次郎は稀に見る親孝行者でした。四十有余年間、一年たりとも送金を忘却した事はありませんでした。親戚一同感謝しておる次第です。母親は昭和八年、八十二歳で他界しました。

昭和二十九年七月二十五日

戸田　金兵衛

東　良三様

この手紙は、アラスカ研究の第一人者である東良三氏の依頼で書かれたものである。重次郎の少年期の腕白振り、青年期の神出鬼没振りや、アメリカから来る新聞の英語に振り回される郷里日の出町の人々の様子が活写されていて面白い。

アラスカは慶応3年、アメリカがロシアから720万ドルで購入。ゴールドラッシュが始まる明治35年ころまでは極寒の荒野であった。

エスキモーのチーフとなった和田重次郎(32歳)(右から2番目)

三、母親セツと、重次郎の手紙

重次郎の母セツは、周布郡妙口村、村上助六の二女として生まれ18歳で小松藩の武士である和田源八の後妻として、明治2年2月18日に入籍。

そして、武士の身分がなくなった後、源八が明治12年の初夏に病死すると、生活に困って製紙業の盛んな紙の里、素鷲の新場所(現松山市日の出町)に移住。

それから昭和8年8月14日に死亡するまでの54年間を、日の出町に住みつき、遠い極北の地アラスカで活躍する重次郎の無事を祈ったのである。

私より6歳年上の兄の話によると、「大正の終わり頃、セツさんはとても上品で、優しく、近所の子供たちが遊びに行くと、必ずアメ玉を呉れたよ」と言う。

近所の子供を可愛がることによって、遠い異国のわが子を偲んでいたのであろう。

重次郎の母セツ

そして、その淋しいセツの心を満たしてくれるのは、年に一、二度来る重次郎の手紙であった。

「母上様　昨年ヨリ山中ニ入リ込ミ　タンケン　イタシテ居マシタ本日※(昭和2)九月廿五日ニ　当地ニ　出テキマシタ

今朝米金百弗送リマシタ　御受取下サレ　母様ニハ御身　御ソヲケント存居マス

私ハ　今ダ　何ノビヨキモ　セズ　ゲンキデ居マスレバ　御安心下サレ　シテ此中ニ入テ有ル　ジヨブクロニテ　御手紙下サレマセ

親ルイノ人ハ　ミナミナ御キゲンカ　イナヤヲ　クワシク知シテ下サレマセ　何レ又アトカラ手紙差上マス　御身大切ナサレマセ」

「犬橇使いの神様」と言われ、英語はもとより、エスキモーの言葉まで習得していた重次郎。しかし、少年時代に勉強の機会を失い、とつとつと書かれたこの手紙は、かえって私たちの胸を打つのである。

和田重次郎小伝

明治24 17歳で渡米。捕鯨船に乗り組み、北極海で働く。(英語・犬橇を習得する。)

明治29 三か月間帰国し母に孝養を尽くす。

明治30 犬橇を駆って遭難船を救う。23歳

明治33 ノームで行われた五〇マイル犬橇競走で優勝。26歳。以降優勝を繰り返す。

明治36 有名な黄金の心臓フェアバンクスで砂金発見者の一人となる。29歳

明治39 原住民のチーフとなり妻をめとる。

※　以後、金鉱・油田の発見、犬橇を駆って北極圏六千キロの探検、未開地の地図作成など、アラスカ開拓期に大活躍をした英雄であり、波瀾万丈の人生であった。